正宗白鳥全集　第五巻

正宗白鳥全集

第五卷

戯曲

新潮社版

正宗白鳥全集　第五巻

昭和四十一年七月三十日　發　行
昭和五十一年八月三十日　セット版
全十三巻セット定價五二〇〇〇圓

著　者　正宗白鳥
發行者　佐藤亮一
印刷所　大日本印刷株式會社
製本所　新宿加藤製本
發行所　株式會社　新潮社
162 東京都新宿區矢來町七一
電話　業務部(〇三)二六六一五一一一
編集部(〇三)二六六一五四一一
振替　東京四―八〇八番

© Yuzō Masamune Printed in Japan 1966

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

正宗白鳥全集　第五巻

監修

河上徹太郎
小林秀雄
中村光夫
山本健吉

編集

中島河太郎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第五卷　目次

白　壁……九
秘　密……三一
影法師……六四
人生の幸福……八九
ある心の影……一一〇
梅雨の頃……一三六
農村二日の出來事……一四七
隣家の夫婦……一七三
一日の平和……一九八
柿の木……二一五
安土の春……二二九

勝頼の最後……二三九
歡迎されぬ男……二五九
光秀と紹巴……二八八
みんな出鱈目……三〇五
天使捕獲……三三〇
江島生島……三四三
死んだやうな平和……三六〇
演藝時評……三七五
解　題……中島河太郎……四六七

戲曲

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

白　壁

鶴　見　平　造（村の青年、久吉と同窓の友）
その父　才　平（魚問屋）
旅藝人、村の人々

時

晴れた秋の午後から夜

場　所

中國の海岸の小村

人　物

相川久吉
妻　さと
母　せき
濱田仙次（相川父子と懇意な近村の資産家）

上　（午後）

奥行の深い古びた田舎の縁側、その前の庭とも云へぬ荒れた空地は數株の野生の菊花のみで色取られてゐる。張物の板が縁側の片隅に立掛けられ、刻んだ大根や芋などが干されてゐる。低い垣根の直ぐ外は海近い通路で、さまゝ〳〵な村の者が通つてゐる。空地から奥の方に斜に白壁の倉が見えてゐる。

久吉（色の黑い小柄な見榮のしない二十四五の男。黑つぽい兵子帶をしめてゐる）は縁側に腰掛けて肱しさうに空を見上げながら、卷煙草を吸つてゐる。二三人の農夫や漁夫が垣の外を通り抜けたがその一人は此方を見て、輕く挨拶して行つた。久吉は氣付かぬ風で、矢張り遠く

の方を見てゐた。と、その後から澁紙包の荷物を擔つた男が現はれたが、立留つて、

×「一寸お尋ね申します。鶴見才平さんと云ふ家はどの邊で御座いませう」(高い聲で訊く)

久吉　(その方へ目を向けて)「鶴見の家かね。それは此處を三丁ばかり行つて、右手の角の家だ。新しい大きな家だから直ぐ分るよ」

×「有難う御座います」

その男は行き過ぎると、直ぐ後から葛籠を載せた荷車が來た。子供が二三人隨いて來る。車を曳いてゐるのは村の者で、話しながら一緒に歩いてゐるのは隣國の面藝役者。(麻裏草履に黑い股引で、尻をからげてゐる。四十前後の男)それを見ると、久吉は懷かしさうに垣根の方へ近づいた。村の者も足を留めて挨拶する。役者も久吉の顏を見詰めて會釋する。

役者　(愛嬌を含んで)「お變りも御座いませんか。一昨年はいろ〳〵御厄介になりました」

久吉「……去年は來なかつたね。病氣だつたのかね」

役者「いや。家の中に少し取込みが御座いまして、……度々お手紙を頂きましたが、つい御無沙汰を致しまして申譯が御座いません」

久吉「毎年極つて來る者が來ないと淋しいよ。僕なぞも子供の時から、大抵毎年君の顏を見てゐるね」(感じを籠めて)

役者「御當地ぐらゐ贔負にして頂く所は御座いませんから、私も一年でも休みますと、何だか氣に掛つてなりません。……今年も矢張此方のお宅でお邪魔になることゝ思つてゐましたら、今度は別ださうで御座いますな。しかし、今晩は是非お出掛なすつて下さいまし。後幕も新奇に拵へましたし、變つた面白い仕草も御覽に入れます」

久吉　(親しげな口調で)「さうかい。何をやるんだつたな。今少し前に榮次が觸れて廻つとつたが、うつかりしてゐて聞かなかつたが、何んだつたかね」

役者「藝題ですか。今晩は八陣に堀川。それに千代の御殿か何かやらせて頂く筈になつて居ります」

久吉「毎年同じ者だね。偶にはもつと變つた面白い者はやれないものかね。僕は君の八陣は三度も見てゐるよ。子供の時分には君の親爺のを幾度も見てゐるし……」

役者「しかし、鬘も衣裳も隨分新奇に買込んだんですぜ。私が工夫して拵へさせたのも御座います」

久吉「どんなのだい。一寸見せて貰へないかね」(荷車の方へ目をつける)

役者　(笑ひながら)「今夜彼家でゆつくり御覽下さいまし。途中で商賣物の玉手箱を開けちゃ、手品の種を明かすやうですから　(と、珍しさうに此方を見てゐる子供を顧みて)鬼

が出るか蛇が出るか、どんな別嬪が飛び出すか、今晩のお樂みにして置きませう。（と、垣根を離れて）此方の御隱居樣も相變らず、どれか語つて下さるんでせう」

久吉（不快な面持して）「これで語り手次第で君の藝も演り難くいだらうな。方々廻つてゐると隨分下手な奴に語られて困るだらう。しかし何も商賣だ。まあ、御機嫌取つて喜ばせときなさい」

役者（笑ひながら）「いや御當地は皆樣が御熱心ですから、張合ひが御座います……いづれ明朝は御挨拶に一寸御伺ひ致します」と行き過ぎる。

子供等は何か囁きながら、隨いて行く。久吉は後を見送つてゐる。と、おさと（十八九の色白の女、手拭をかぶり赤い襷を掛けてゐる）横手より手紙を持つてくる。

さと「貴下（と、後から聲をかけて手紙を渡して）先つきから濱田の叔父さんが見えて居ります」

久吉「さうかい。早く來たね。此方へ來て貰つて呉れ」（緣側に腰掛けて、封筒の裏を見ながら、封を切る）

さと「それから、あの今の面藝に幾らか寄進をして呉れつて云つて來ました。幾らぐらゐ包んでやつたらよろしいでせう」

久吉「斷われ〳〵。今そんな詰らないことに銭一文も出せないよ（と、强く云つて、手紙を讀みかけたが）しかし、おれの家だけ出さない譯にも行かんだらうな。お母樣に相談して幾らでもやつて置け。どうせ見に行きやしないが……」

さと「でも、お金を出すほどなら、見に行かいでは損ですわ」

久吉「ぢや、お前だけ行きたけりや行け、あの家でやるのに、おれは行つて見たつて面白くない」（次第に手紙の中に引込まれて、俯首いて目を凝らす）

さと（行きかけて手紙の方を見て）「まあ、長い手紙だ。その人は何を云つて來たんでせう（と、氣遣はしさうに訊く）また借金の催促ぢやないんでせうか」

久吉（顏を上げて微笑して）「お前は手紙さへ來りや心配してる……しかし、おれにだつて偶には氣持のいゝ手紙を寄越す奴もあるんだよ」

さと「それだと、私も安心ですけれど、郵便の聲のするたんびに、私胸がドキツとするんですよ」

おさと退く。鶴見才平（五十歲位の色の黑い頰の痩せた、頭の禿げかゝつた男。老人染みた衣服を着てゐれど、角帶を締めて前垂を掛けて舞臺へ現はれ、他の村の者よりも、氣が利いてゐるらしく見える）

白壁の見える方の道から出て來て、注意して家を見ながら垣の外を横切つて、ふと久吉に目を付けて「今日は」

と聲を掛けたが、久吉は手紙ばかり見てゐて氣が付かない。才平は行き過ぎる。久吉は手紙を封筒に收めて考込む。

濱田仙次（五十近い頑丈な男。紋付の羽織を着てゐる）

「久吉此方かい」と云つて、緣側の障子を開けて。

仙次「今日は馬鹿に溫い。風がなくつて海も油を流したやうに靜かだ。何時來ても此處は眺望がいゝ（と、海の方を眺めて、端近く坐つて）先日中の疲れは癒りましたかい（と、久吉の顏を注意して見て）少し血色が惡いやうですな」

久吉「どうもまだ心が落着ないのでブラ〳〵して居ります。……今日お出で下さらうとは思ひませんでした。お忙しいのに毎度御迷惑を掛けます」

仙次「いや、私も氣掛りぢやで、一日も早くと思ひましてな。君のお手紙はなくても、どうせ最一度は來る筈であつたのですし……それはさうと、先日荒方極りを付けといたのに、また大將が無理を言ひ出したと見える。どうも困つた人ぢや。假りにも親子となつてゐながら、さう人情を踏付けちや寢醒めが惡からうと、私は思ひますがな」

久吉「それは何をしようとも先方の勝手だから仕方ありませんが（と、俯目で萎れた聲で云つたが、次第に興奮して）しかし、當然私の所有となつてゐる土藏までも道を塞がれちや困りますからね。御承知の通り、二軒の家を籤引で分けて、地所も眞中から二つに分けたので、土藏の中ほどが堺目になつてゐます。ところがどんな量見だか、二三日前に親爺が自分であの堺目に繩を引いて、竹垣を拵へかけてるんです。垣が出來れば土藏の入口はすつかり塞がれて、此方からは入れなくなるんです。無論入らすまいと思つてあゝしてるんでせうが。……一體あの土藏は私の家の屋敷續きだから、地所は分けても、土藏だけは此方で使用することに話が極つてるんですが、あゝされた日にや、入口を新奇に造り變へでもしなければ、土藏は何の役にも立ちません。ですから二三日前に使をやつて、入口だけ開けて貰ふやうに話して見ますと、おれの地所へ足踏みしないで土藏へ入るやうにして呉れ、垣がないと不用心だからと云ふんです。しかし空地なんだから不用心も何もないんだと思ひますがね。……兎に角ほんの通り道だけ開けて貰へばいいんですから、どうか貴下から親爺にその譯をお話しなすつて下さい」

仙次（呆れた樣子）「成程。あの人は旋毛曲りの分らず屋ぢや、自分の方で土藏を横取りしようと云ふのなら、まだしも譯が分つとるが、自分も使用しなければ、人にも使用させんために入口に垣をつくるなんて、何と云ふ量見だらう。……よろしい。これから行つて私が話をつけて上げよ

う。そんな無法な事があるものぢやない」

久吉「どうぞ、お願ひします。貴殿でゞもなければ、外の人の云ふ事は親爺は耳にも入れんのですから、尤も今土藏の中には何にも入つてはゐないんです。刀でも道具でも大抵親爺が賣てしまつて古い書物やがらくたが少し殘つとるばかりです。しかしあの土藏は相川家を興した祖先が建たので、あれだけは、祖父の時分大火事にも燒けなかつたんださうですから、いくら朽ちても私の家の者として保存しときたいんです」

仙次「それはいゝ事ぢや。私も昔話に聞いとるが、當家の何代目かの與助と云ふ人が、初て瀨戸物を上方へ賣出した時分に、商賣物を入れとくために、あの土藏を建てたとか云ふことです。その人が一代に隨分儲けたんぢやさうですぜ。先づ當家の中興の祖とでも云ふんだらうな。……それが君のお父さんの世になつて、かうなつてしまつたが、これからは君の世だから、大に奮發しておやりなさい」

久吉「えゝ、それはやつて見ます。一生懸命やつて見ます、（興奮した口調で）五六年の間にはどうかして借金を拂つて、昔通りに回復して見せます。先日貴下の仰有つたやうに、今の場合離れでも二階でも、不用な所は崩して、家を縮めても構ひません。母が何と云はうとも、家の格式をぐつと落して、腕一本の貧乏人になつて、これからやり直します。しかし、あの土藏だけは、たとへぼろ〳〵になつても保存しといて、何時か私の家の運が芽を吹き出した時分に、壁を塗り直して蟲の食つた柱も取變へて充分に修繕します。母の話を聞きますと、昔白壁の珍らしかつた時分には、あの土藏の壁が沖からでもよく目に着いたさうですよ、舟が島の角を廻つて入つて來ると、あの土藏が此の村の目印のやうに一番よく目に着いてたさうです（その白壁の方を顧みながら）私一人のためにも、あれはいろんな紀念になつてゐます。小さい時分にあの中へよく押込められたし、大きくなつてからは、自分でよくあの中へ隱れたのですよ。家の中で厭な事を見たり聞いたりするのが堪へられなくなると、あの中へ逃げて行つて、戸を締めてしまつて、金網の窓の側で書物を讀んだり、海の方を見たりしてゐました。三ケ月もつゞいて町の學校へ行つてると、必ず何かの口實で親爺に呼戻されて、家の詰らない用事に追ひ使はれるから、私は藏の中を學校のやうにして、隙を見ちや彼處へ入つて勉强してゐました。いや、彼處ではいろんなことがありました。金網の窓から一度恐ろしい厭な者を見ました」

仙次「ふゝん（相手の言葉には心を留めず、その顏を見詰めながら考へてゐて）君の人相を私が判斷すると、この二三年が大事なところだ。今の中に用心して間違つたことのな

いやうになさい……かうして見てると、人相の上から、君は九州で死んだ實のお父さんよりも、此方のお父さんに似て來てるやうに思はれますて」

久吉「何故でせう、それは（氣味惡き顏付して）私はどちらの父にも似たくはありませんよ。今でもぼんやり覺えて居りますが、實の父の病窶れた顏は、懷かしいよりも恐ろしい氣がします。よく子供の時分から死んだ父に似てゐないと云はれてゐましたが、私は似てゐないのを悅しいと思つてた位でした。そして此家の親爺もよく、お前はいろはも知らん時分からこの家で育つたのだから、おれがお前の本當のお父さんだ。おれの後嗣はお前の外にないんだと云つて、私もその氣になつてゐたんですが……しかし、今となつて見ると、私には實の父も義理の父も、父と云ふ者はないんですね。何方の父に對しても懷かしいと思ふことがないんですもの。そして結局父のないことを望むやうになりました。先日親爺に緣を切られて別れた後で、一晩獨りで考へて見ましたが、私がこれまで親爺から受けた者で、一つとして幸福な事はなかつたと思ひますよ。二十年間あの父の顏を見てゐただけでも、どの位私の心は傷つけられたか知れません。何故父はあんな相をしてゐるんでせう。……あの土藏の中に、與助と云ふ人の繪像と、曾祖父の繪像とがありますが、どちらも豐かな氣持のいゝ相をして居りますよ。あの系統を引いて居りながら、父だけは何故そんな幸福な相を受繼いでゐないんでせう」

仙次（微笑しながら、煙草をゆるく吹いて）「何代も續いてる間にはたまには屑も出るだらう（と輕く云つて）しかし、お父さんも以前はあゝでもなかつたんですぜ……矢張魔が差したやうなものだな」（と獨言のやうに云つて首付く）

久吉「魔がさしたのかどうしたのか。私はこれまで親爺の心が些とも分りませんでした。幾度も借金の使ひにやられたり、幾度も一緒に舟に乘つて方々の島へ行つて見たりしましたが、何のために親爺は奔走してるのかよく分りませんでした。自分でも明ら樣に心持を私に打明けたことはなかつたのです。そして、私の方から訊きたくても、あの顏を見ると、氣臆れがして、とても訊く氣になれなかつたのです。だから、何時も只云はれたまゝに默つて從つてゐたのですが、默つて從つた揚句に、親爺はあの通り不意に私と母とを殘して、自分だけ出て行くやうになつたのです」

仙次（相手の話を抑へるように）「分つてる〳〵。私にもよく分つてるからその後は話さん方がよろしい。家のためには、一日も早く大將が別れて呉れた方が却つて得策だと思つたから、私も强ひて留めはせなんだが、いづれゆつくり君の相談相手になつて、この後の方法を極めようと思つてゐます。帳簿の整理はまだやつてないんですかい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com